

NY ブルックリン・ブルワリーの ヒエログリフ文の原文を求めて —エジプト語研究における暗黙知の可視化—

永井 正勝[†]

キーワード： 新エジプト語、ヒエログリフ、ヒエラティック、暗黙知

1 はじめに

2014年8月24日、筆者はニューヨークにあるブルックリン・ブルワリーの屋舎の壁にヒエログリフの一文が書かれているのを目にした(図1)。

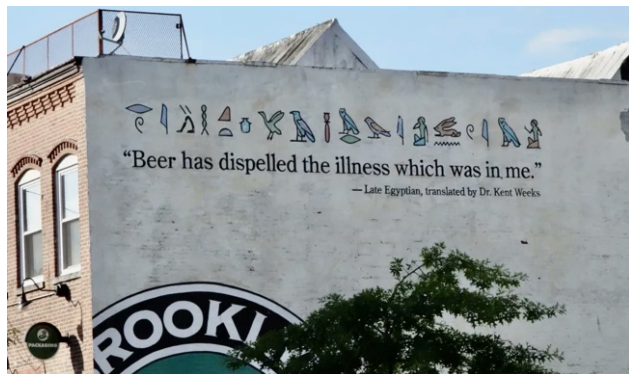


図1：ブルックリン・ブルワリーの壁面に書かれたヒエログリフ文
[2014年8月24日 筆者撮影]

[†]東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)

とっさにこのヒエログリフを読んでみたところ、古代エジプト語として正しい表現であることが了解された。また、下に付されたケント・ウィークス博士 (Dr. Kent Weeks) による英訳はヒエログリフから忠実に訳出されたものであった。

英訳の下に「Late Egyptian, translated by Dr. Kent Weeks (新エジプト語、ケント・ウィークス博士によって翻訳された)」と書かれていることもあり、ヒエログリフ文の原文が気になっていた筆者は、帰国後、原文を探すこととした。その結果、完全に同一な表現を含む資料を見つけることはできなかったが、類似した表現を含む資料を見出すことができた。そこで本稿では、原文探索の手続きとその結果について、作業の順を追って記述し、広く公開しようと思う。

本稿でこのような記述を公開しようと思ったのは、探索の記録を通じて、新エジプト語の学習や研究で基本的な研究ツールとなる辞書、資料集、データベースの種類を示すとともに、その使い方を具体的に例示することができれば、特にエジプト語学習の初学者に有益な情報になるのではないかと考えたからである。資料の探し方、辞書に記載された出典表記の見方、データベースの使い方は、エジプト学者であれば理解していて当然となる知識ではあるが、このような知識は、個々の研究者が各自で会得するという側面が強く、それゆえ言語化されずにいわば暗黙知として個々の研究者の中に留まっていることが多い。このような暗黙知は、授業、勉強会、研究室での会話などによって時間をかけて身に付けることが多いように思われる。だが、エジプト学科の存在しない我が国にあって、その会得は容易ではない。このような状況を鑑み、本稿では、探索結果の記述を通じて、研究ツールの種類と使い方に関する暗黙知の可視化を行いたいと思う。

2 ブルックリンのヒエログリフ文の検討

2.1 言語記述

最初にブルックリンのヒエログリフ文の言語記述を示すと (1) の通りと

なる¹。

(1) ブルックリンのヒエログリフ文の言語記述

文字 ID	1-2-3-4-5	6-7-8-9	10-11
翻字	D21-Z7-M17-Z4-D54	V28-N29-X1-W23	G41-G1
音価	<i>r-wj-/-/</i>	<i>h-q-t-/</i>	<i>pʒʒ</i>
転写	<i>rwj</i>	<i>hnq-t</i>	<i>pʒ=</i>
グロス	取り除く:完結相	ビール:F.SG	定冠詞:M.SG
12-13-14-15	16-17-18-19-20	21-22	23
U23-G17-D21-G37	M17-A2-E34-N35-Z7	M17-G17	A1
<i>mr-m-r-/</i>	<i>j-/-wn-n-/</i>	<i>j-m</i>	<i>j</i>
<i>mr</i>	<i>j.wn</i>	<i>j.m=</i>	<i>j</i>
病:M.SG	関係節過去転換詞	中に	1.SG.C

「私の中にあつた病をビールが取り除いてくれた」(完結相主節)

2.2 資料の変種

ブルックリンのヒエログリフ文は、わずか 23 文字、7 語からなる短いものであるが、以下に述べる特徴から、この原文がヒエラティックで書かれた新エジプト語であることがわかる。

①G41 と定冠詞 *pʒ*

文字 ID 10 の G41 は男性単数形の定冠詞 *pʒ=* (G41-G1) を構成する文字である。ブルックリンのヒエログリフ文の原文がヒエラティックで書かれた新エジプト語であると判断した根拠の 1 つに、この G41 の使用がある。

¹言語記述で用いる文字 ID とは、例文ごとにおける文字の表記順である。翻字で用いる文字番号は原則として Grimal et al. (2000) に依拠した。音価ならびに転写で用いるアルファベット記号の一覧は付表に記した通りであるが、これは Wernigh (2015) に依拠したものである。転写における *-ʒ=* の補助記号を含め、グロスは Di Biase-Dyson et al. (2009) で提案されている規則を参考としつつ、本稿独自に設定した。

というのも、ヒエログリフの表記では G41 ではなく G40 が使用されるからである。しかもヒエログリフでは、通常は G40 のみで定冠詞を表記する (Gardiner 1957: §110)。定冠詞が G40-G1 で表記されているという特徴は、ブルックリンのヒエログリフ文が新エジプト語のヒエラティック資料からの翻刻であることを示唆している。

②Z4

rwj「取り除く」にある文字 ID 4 の Z4 は通常では不要であり、ここでは黙字となっている。この例のように、新エジプト語における語の表記では、転写に反映されない文字として、Z7、Z4、X1、U33、U33-M17 が特に後末に付加される (Cavillier 2018: 20)。

③Z7 と関係節過去転換詞 *j.wn*

相対的過去の関係節を形成する関係節過去転換詞 *j.wn* (Neveu 1998: §30.2; Cavillier 2018: 114-115) の使用は新エジプト語に特徴的なものである。*j.wn* の起源は動詞 *wnn*「存在する」の完結相能動分詞である (Erman 1933: §377)。*wnn*「存在する」が関係節過去転換詞になった場合、語形が *wn* となり、語末に Z7 を伴うことが多いようである。文字 ID 2 の例のように Z7 は表音文字として *w* の音価を持つが、*j.wn* の文字 ID 20 にあるように黙字となることもある。新エジプト語の表記では、先に述べた Z4 のように、不要だと思われる Z7 の文字が特に語末に付加されることがある (Černý & Groll 1993: Chap. 1.1.2)。

ブルックリンのヒエログリフ文は、文字種 (定冠詞 *p3=* の G41)、語種 (定冠詞 *p3=*、関係節過去転換詞 (*j.wn*)、語の綴り (動詞 *rwj* の Z4、関係節過去転換詞 *j.wn* の Z7)、文法 (関係節過去転換詞 *j.wn* の使用) の 4 点から、新エジプト語と呼ばれる変種で書かれた原文をヒエログリフに翻刻したものであることが想定される。そして、原文が新エジプト語であるということは、パピルスやオストラコン (土器片/石片) に右横書きのヒエラティックで書かれていたことが想定される。

2.3 構文

全体は完結相能動態の主節 (Černý & Groll 1993: Chap. 14) であり、語順は「他動詞＋主語＋目的語」(*rwj ḥnq-t pꜣ=mr* 「ビールが病を取り除いた」) となっている。さらに目的語 (*pꜣ=ḥnk-t* 「ビール」) を先行詞とする相対的過去時制関係節 (*j.wn jm=j* 「私の中にあった」) が加えられている。主節の中の *rwj* 「取り除く」という行為は、発話時よりも過去の出来事だが、相対的過去時制関係節 (*j.wn jm=j* 「私の中にあった」) は、「取り除いた」時点よりも更に過去の状況を示している²。

3 原文探索の準備

3.1 検索に使用する参考資料

ブルックリンのヒエログリフ文の原文が新エジプト語であるとの想定から、原文を探索するために使用する参考資料として、以下のものが浮上する³。

(A) 紙媒体

①新エジプト語の出典付き辞書

Lesko & Lesko (2002-04) *A Dictionary of Late Egyptian*.

(B) デジタル媒体 (データベース)

①転写・翻訳等の情報を格納したオンライン語彙集

Thesaurus Linguae Aegyptiae (TLA)

(<https://aaww.bbaw.de/tla/index.html>)

②新エジプト語の出典付きオンライン・コーパス

Rameses Online

(<http://ramses.ulg.ac.be>)

²Černý & Groll (1993: Chap. 48.3.4) は相対的過去を *pluperfect* 「大過去」として記述している。

³本稿で記載した URL の最終確認日は、いずれも 2021 年 8 月 31 日である。

特定の資料を探し出すという目的では、元資料の出典の付いた参考資料を使用することになる。そのようなもののうち、新エジプト語の辞書としては紙媒体の Lesko & Lesko (2002-04) が有名である。また、新エジプト語に特化したものではないが、デジタル媒体のオンライン語彙集では Thesaurus Linguae Aegyptiae (TLA) がエジプト語研究で広く利用されている。その他、新エジプト語資料のオンライン・コーパスとして Rameses Online のベータ版が公開され、これも広く利用されている。そこでこれらの参考資料を使用して検索を行うこととした。

3.2 検索語の選定

ブルックリンのヒエログリフ文で使用されている語を内容語と機能語に分けると以下の通りである。

内容語

rwj 「取り除く」、*hnq-t* 「ビール」、*mr* 「病」

機能語

pt= 「定冠詞」、*j.wn* 「関係節過去転換詞」、*jm*= 「に」、*j* 「私」

機能語は綴りのバリエントが比較的になく、種々のテキストで広く使用されるため、テキストを特定するユニークキーとは成り難い。それに対して、内容語は綴りのバリエントが多いため、その綴りに着目すれば、テキストを特定する手がかりとなる可能性がある。そこで、3種類の内容語に着目して原文を探索することとした。

4 紙媒体辞書を起点とした探索

ブルックリンのヒエログリフ文の内容語と同一綴りの事例を、まずは紙媒体辞書の Lesko & Lesko (2002-04) で調べることにする。Lesko の辞書には出典の記載があるため、同一綴りの語が掲載されていれば、その出典を

確認することにより、ブルックリンのヒエログリフ文の原文にたどり着ける可能性がある。

4.1 Lesko の辞書の確認

4.1.1 記載概要

Lesko & Lesko (2002-04) における 3 種類の内容語の記載例は以下の通りである。

① *rwj* 「取り除く」

Lesko & Lesko (2002-04:I, 267) に掲載されている *rwj* の例は、前置詞 *m* を伴う用例を含めて 14 件である。*rwj* には、「逃げる (to flee)」、「出発する (to depart)」、「減少する (to decline)」などの自動詞の用法もあるが、ひとまず綴りに着目すると、ヒエログリフで記された 14 件の綴りの中に、ブルックリンのヒエログリフ文と同一綴りのものが 1 件認められた。その出典には *LRL 8R12* と書かれている。

② *hmq-t* 「ビール」

Lesko & Lesko (2002-04:I, 319) に掲載されている *hmq-t* 「ビール」の例は 7 件である。ヒエログリフで記された 7 件の綴りの中に、ブルックリンのヒエログリフ文と同一のものは含まれていなかった。

③ *mr* 「病」

Lesko & Lesko (2002-04: I, 191) に掲載されている *mr* 「病」の例は 3 件である。ヒエログリフで記された 3 件の綴りの中に、ブルックリンのヒエログリフ文と同一のものが 1 件含まれていた。その出典には *LRL 5V19* と記されている。

4.1.2 Lesko の辞書における出典表記

Lesko の辞書では、*rwj* と *mr* の 2 語について、同一綴りの事例が 1 件ずつ確認された。出典はそれぞれ *LRL 8R12* と *LRL 5V19* である。この出典表記には独自のルールが採用されているので、それについて述べておく。こ

の出典表記は「資料集名の略号、資料集における資料の記載の順番、表面 (Recto) と裏面 (Verso) の区別、原資料における行数」の順に記載されており、*LRL* 8R12 の場合は、*LRL* という資料集の 8 番目に掲載されている資料の表面 (Recto) の 12 行目となり、*LRL* 5V19 の場合には、*LRL* という資料集の 5 番目に掲載されている資料の裏面 (Verso) の 19 行目となる。偶然にも、いずれも *LRL* という資料集から掲載されたものである。Lesko の辞書に掲載されている略号一覧 (Lesko & Lesko 2002-04: I, x) によれば、*LRL* という略号で示される資料集は以下の著作を指す。

LRL = Černý, Jaroslav (1939) *Late Ramesside Letters*.

LRL の 8 番目と 5 番目に掲載されている資料が実際にどのような資料であるのかは Lesko の辞書に記載されていないため、*LRL* = Černý (1939) でそれを確認しなければならない。

4.2 *LRL* における翻刻テキストの確認

LRL は新エジプト語で書かれたヒエラティック書簡の資料集である。ただし、本書にはヒエラティックの写真やトレースは掲載されておらず、ヒエログリフ翻刻と注釈が掲載されているのみである。そえゆえ、正確に言えばヒエラティック資料の翻刻集ということになる。次に、*LRL* 8 と *LRL* 5 に掲載されている内容がブルックリンのヒエログリフ文と同一であるか否かを確認する。

4.2.1 *LRL* 8R12 の確認

LRL 8 の資料名は Papyrus Geneva D407 であり (*LRL*, p.viii)、*LRL* の pp.13-17 にヒエログリフ翻刻が記載されている。表面 (Recto) の 12 行目を確認したところ、*bwjjj=rwjrd-wyjm* 「私はそこから逃げ去ることはない」と記されており、ヒエログリフ文とは異なるテキストであった。ちなみに、この文における *rwj* の意味は、*rd-wy* 「両足」を伴い、「逃げる」(直訳は「両足を取り除く」) となっている。

4.2.2 LRL 5V19 の確認

LRL 5 の資料名は Papyrus Leiden I 370 であり (LRL, p.viii)、LRL の pp.9-11 にヒエログリフ翻刻が記載されている。裏面 (Verso) の 19 行目には *j.rwj p̄i mr nti jm=[j]* 「[私の] 中にあるこれなる病を取り除き給え」と記されている。このテキストの内容はブルックリンのヒエログリフ文とは異なっているが、*rwj* 「取り除く」、*mr* 「病」、*jm=[j]* 「[私の] 中に」という表現が共通している。そこで、次に LRL 5=Papyrus Leiden I 370 の詳細を確認することとした。

4.3 Papyrus Leiden I 370 の確認

4.3.1 Papyrus Leiden I 370 の所蔵番号

LRL に記載されている資料名の Papyrus Leiden I 370 は、オランダのライデンにある国立考古学博物館 (Rijksmuseum van Oudheden: RMO) 所蔵の、I 370 という登録番号のパピルスである。RMO の公式 WEB ではコレクション検索が可能であるため、登録番号の検索で I 370 を入力すれば、本パピルスの情報がヒットすることが想定される。

Rijksmuseum van Oudheden (RMO), Search collection
(<https://www.rmo.nl/en/collection/search-collection/>)

しかしながら、実際には I 370 という登録番号で検索を実行してもレコードがヒットしない。というのも、実は I 370 というのは旧式の登録番号なのであって、RMO の公式 WEB で登録番号からコレクションを検索する際には、現行の登録番号を入力しなければならないからである。

RMO の資料における登録番号の変更、つまり I で始まる番号が古いものであるという情報を筆者が知るようになったのは、2020 年 10 月に RMO 所蔵のパピルス書簡 AMS 24a-2 を読解していたことによる。AMS 24a-2 は、日本で開催の「ライデン国立古代博物館所蔵古代エジプト展」(2020-2021 年) の出展作品の 1 つ (展示番号 230) であるため、筆者は本パピルス書簡を 2020 年 10 月に読解した。その際、本書簡に関する先行研究において、

AMS 24a-2 ではなく、I360 という番号が使用されていることがわかった⁴。言い換えると、エジプト学では、RMO 所蔵の一部のパピルス書簡に関して、現行の登録番号ではなく、古い登録番号が流通しているということになる⁵。したがって、古い登録番号の資料については、現行の登録番号を調べなければ、純然な調査を行うことができない。そこで今回は Google を使って検索したところ、以下の WEB サイトにて、I370 の現行の登録番号を知ることができた。

Trismegistos (TM), Hieroglyphic and Hieratic Papyri

(<https://www.trismegistos.org/hhp/index.php>)

Trismegistos (TM) によれば、I370 の現行の登録番号は「AMS 38 b」である。

Leiden, National Museum of Antiquities I 370

= Leiden, National Museum of Antiquities AMS 38 b

(<https://www.trismegistos.org/hhp/detail.php?tm=139422&i=7>)

ここで、RMO のコレクション検索で「AMS 38 b」を検索したところ、実はこれもヒットしなかった。そこで 38 と b の間の半角スペースを削除して「AMS 38b」で検索した結果、本資料の記載ページを見つけることができた⁶。

⁴AMS 24a-2 の翻刻を掲載した Leemans 1861: 63-64; Janssen 1960 では、古い登録番号が使用されている。

⁵例を挙げると、新エジプト語の文法書の Cavillier (2018), Černý & Groll (1993), Erman (1933), Junge (2008), Korostovcev (1973), Neveu (1998), Satzinger (2020) でも古い登録番号が用いられている。

⁶RMO のコレクション検索では「一般検索 (General search term)」に I370 を入力すると AMS 38b がヒットした。これは、AMS 38b の参考文献 (Literature) の中に I 370 という文字列が含まれていたからである。結果的に AMS 38b を見つけることができたが、I 370 と AMS 38b の関係性については WEB に記述されていないため、登録番号に新旧があるというという情報を知らない利用者/検索者は、番号の違いに戸惑うことになるのではなかろうか。

Brief op papyrus van Djehoetymes aan Boetehamon

(ジェテユウティメスからブウテハアメンへのパピルス書簡)

(<https://www.rmo.nl/en/collection/search-collection/collection-piece/?object=22426>)

RMO 所蔵の本パピルス (I 370=AMS 38b) を、以下、ライデン書簡と称することとする。

4.3.2 ライデン書簡 (I 370=AMS 38b) の言語記述

図 2 は、ライデン書簡裏面 19 行目の一節の写真 (Rijksmuseum van Oudheden 提供)、Černý (1939) の翻刻、筆者の作成した翻刻を示したものである。また、言語記述の結果は (2) に示したとおりである⁷。



図 2 : ライデン書簡裏面 (I 370=AMS 38b) 19 行目の一節の写真と翻刻

(2) ライデン書簡 (I 370=AMS 38b) 裏面 19 行目の一節の言語記述

文字 ID	1-2-3-4-5-6-7	8-9-10
翻字	M17-A2-D21-Z7-M17-Ef100-D54	G41-G1-Z4
音価	j-/r-w-j/-/	p ³ -j-i
転写	j.rwj	p ³ i
グロス	取り除く:命令法	この:M.SG

⁷ ヒエログリフ翻刻の作成にはヒエログリフ・エディターの JSesh 7.5.5 (<https://jsesh.genher-khopeshef.org/>) を利用した。

11-12-13-14	15-16-17	18-19	20
U23-G17-D21-G37	N35-X1-Z4	M17-G17	[A1]
<i>mr-m-r-/</i>	<i>n-t-i</i>	<i>j-m</i>	<i>[j]</i>
<i>mr</i>	<i>nti</i>	<i>jm=</i>	<i>[j]</i>
病:M.SG	関係節現在転換詞	中に	1.SG.C

「[私の] 中にあるこれなる病を取り除き給え」(命令文)

最初に翻刻について述べておく。動詞 *j.rwi* 「取り除け」の限定符は D54 (文字 ID 7) である。この文字の字形は横方向に伸びていて高さを持たない。新エジプト語の表記では、このような横長の限定符の上に、「空間を埋める点 (Space-filling dot)」が表記されることがある (Černý & Groll 1993: Chap. 1.3)。本テキストの文字 ID 6 の「点」(Efl00)⁸は、まさに空間を埋める点であろう。これに対して、ブルックリンのヒエログリフ文では、D54 の上に黙字の Z4 (文字 ID 4) が書かれていた。もしかしたら、黙字の Z4 の機能は空いた空間を埋めることにあったのかもしれない。

次に、文法の違いについて確認する。ブルックリンのヒエログリフ文とライデン書簡の文法上の大きな違いは、動詞の時制・相・法が異なる点にある。ブルックリンのヒエログリフ文では完結相主節であったが、ライデン書簡では命令法となっている。関係節転換詞の時制も異なっており、ヒエログリフ文では相対的過去であったのに対して、ライデン書簡では相対的現在となっている。それゆえ、ブルックリンのヒエログリフ文の方は、発話時において病が体から取り除かれていたことを示している。その一方で、ライデン書簡の方は、病がまだ体の中にある状態を記述していたことになる。このことから、ブルックリンのヒエログリフ文の表現は、病が治癒された後に書かれたものであり、その病を患っていた人物は、ライデン書簡で (2) の言葉を発した人物と同一であったのではないか、という作業仮説を立てることができる。

⁸ 「点」を示す文字番号の Efl00 は JSesh 7.5.5 に従った。

そこで、(2) が誰の表現であるのかを書簡を読解して確認したところ、書簡の書き手/送り手であるジェフウティメス (*ḏḥwti-ms*) であることがわかった。また、書簡の筆頭の受け手は彼の息子のブウテハアメン (*bw-thi-jmn*) であった (Davies 1999: 122)。ジェフウティメスがライデン書簡を送った当時、彼は従軍書記として中部エジプトに居たことが判明している (Davies 2018: 331)。息子ブウテハアメンはアメン神の総本山カルナク神殿のあるテーベに住んでおり、先の (2) の表現は、ジェフウティメスが自らの病の平癒をアメン神に祈願して欲しいと息子ブウテハアメンに託した内容であった。

4.4 ジェフウティメスからブウテハアメンに宛てた書簡

ブルックリンのヒエログリフ文 (1) とライデン書簡の一節 (2) が同一人物による記述であるとするれば、書簡の受け手も (1) と (2) で同一であった可能性がある。だとすれば、ジェフウティメスがブウテハアメンに宛てた書簡を調査すれば、その中にブルックリンのヒエログリフ文の原文が含まれている可能性がある。そこで、*LRL* の翻訳集である Wentz (1967: 16-17) に記載されている書簡の年代順リストをもとに、ジェフウティメスがブウテハアメンを含む相手に宛てた書簡を抜き出すと、表 1 のようになる。

表 1：ジェフウティメスがブウテハアメン等に宛てた書簡の一覧

書簡	年代	備考
<i>LRL</i> 1	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」6 年	
<i>LRL</i> 5	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」6 年	ライデン書簡
<i>LRL</i> 4	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」6 年	
<i>LRL</i> 3	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」10 年	
<i>LRL</i> 2	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」10 年	
<i>LRL</i> 50	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」10 年	
<i>LRL</i> 9	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」10 年	
<i>LRL</i> 10	ラメセス 11 治世下、「誕生の繰り返し」10 年	

ライデン書簡が *LRL* 5 であるため、ヒエログリフ文の原文はその後に送られた書簡の中に見つかる可能性がある。つまり調査の対象となるのは、*LRL* 4, 3, 2, 50, 9, 10 の 6 通である。

LRL の翻訳集である Wente (1967) は、出版元のシカゴ大学東洋学研究所 (The Oriental Institute of the University of Chicago) の公式 WEB にて PDF 版がオープンアクセスで無償公開されている。

Wente (1967) *Late Ramesside Letters*.

(<https://oi.uchicago.edu/research/publications/saoc/saoc-33-late-ramesside-letters>)

そこで、効果的に探索を行うべく、この PDF を使用して「beer」の語の検索を行うこととした。その結果、「Now it (i.e. the beer) has removed the illness which was in me.」(p. 37) という表現を見つけることができた。それは *LRL* 9R12 の一節である。*LRL* 9 は大英博物館所蔵の Papyrus BM EA 10326 である (*LRL*, p.viii)。以下、この書簡を大英博物館書簡と呼ぶこととする。

4.5 大英博物館書簡 (BM EA 10326) の検討

大英博物館書簡 (BM EA 10326) は右横書きのヒエラティックで書かれたパピルス写本である。写本のヒエログリフ翻刻は *LRL* 9 (pp. 17-21) に掲載されたものが世界初である (*LRL*, p.viii)。ヒエラティックのモノクロ写真は Janssen (1991: Pls.37-38) に所収されており、カラー写真は大英博物館公式 WEB で公開されている。

BM EA 10326

(https://www.britishmuseum.org/collection/object/Y_EA10326)

翻訳は Wente (1967: 37-42) ならびに Wente (1990: 190-192) に所収されている。

次に、大英博物館書簡の一節を確認する。「Now it (i.e. the beer) has removed the illness which was in me.」の部分を *LRL* 9 で確認したところ、それは表面

(Recto) の 12 行目に書かれていた。12 行目の該当箇所の写真と翻刻を示したものが図 3 であり、その部分の言語記述の結果を示したものが (3) である。

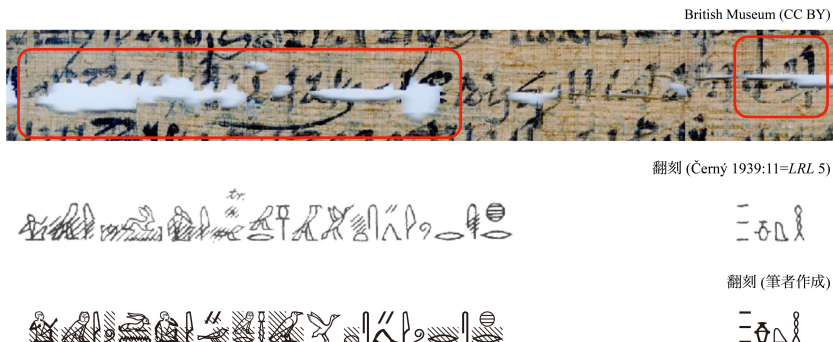


図3：大英博物館書簡 (BM EA 10326) 表面12行目のヒエラティックと翻刻

(3) 大英博物館書簡 (BM EA 10326) 表面 12 行目の一節の言語記述

文字 ID	x1-x2-x3-x4		1-2
翻字	V28-N29-W23-Z3A	省略	Aa1-D21
音価	h-q-/-/		h-r
転写	hnq-t		hr
グロス	ビール:F.SG		小辞
3-4-5-6-7-8	9-10	11-12	
S29-D21-Z7-M17-Z4-D54	S29-X1	G41-G1	
s-r-w-j-/-/	s-/	p ⁱ -i	
srwj	=s	p ⁱ =	
取り除く:完結相	3.SG.F	定冠詞:M.SG	
13-14-15-16-17	18-19-20-21-22	23-24	25
U23-G17-D21-Z4-G37	M17-A2-E34-N35-Z7	M17-G17	A1
mr-m-r-/-/	j-/-wn-n-/-/	j-m	j
mr	j.wn	jm=	j
病:M.SG	関係節過去転換詞	中(こ	1.SG.C

「ビール。[省略] さて、私の中にあつた病を、それ (=ビール) が取り除いてくれた」(完結相主節)

図 3 のヒエラティックを見れば了解されるように、大英博物館書簡には欠損が多く、翻刻において判断に悩む箇所がある。それは、*mr*「病」の限定符 G37 の上にある文字 ID 16 の文字である。本稿では黙字の Z4 と認定したが、*LRL* 9 では空間を埋める点として解釈されている。このように先行研究と筆者とでは文字の判読結果に違いがあるが、パピルスに欠損部分が多いため、どちらの判読が妥当であるのかを断定することはできない。ちなみに、ブルックリンのヒエログリフ文とライデン書簡では、*mr*「病」の語の表記で Z4 も空間を埋める点も書かれていない。

4.6 ブルックリンのヒエログリフ文と大英博物館書簡の比較

ブルックリンのヒエログリフ文と大英博物館書簡には相違点と共通点が見られる。欠損や文字体系の違いを除いて、相違点は、大英博物館書簡において、

- ・ 冒頭に小辞 *hr* が付加されている
- ・ 動詞「取り除く」が *rwj* ではなく *srwj* となっている
- ・ 主語が *hnq-t*「ビール」ではなく *=s*「それ」となっている
- ・ *hnq-t*「ビール」の語の綴りが異なっている
- ・ *mr*「病」の語の綴りが異なっている

という点にある。共通点はその他の部分の *ps=*、*j.wn*、*jm=j* となる。

4.7 小結

本節では紙媒体辞書の Lesko & Lesko (2002-04) を起点に探索を行なった。その結果、ブルックリンのヒエログリフ文と類似した内容を持つテキストとして、大英博物館書簡の一節を見出すことができた。とはいえ、同一内容のテキストではないため、原文が別に存在している可能性をこの時点で

は排除することができない。そこで次に、デジタル媒体 (データベース) を利用して、更なる探索を行うこととした。

5 デジタル媒体 (データベース) を利用した探索

5.1 デジタル媒体 (データベース) を利用した検索の留意点

デジタル媒体 (データベース) を利用した検索の利点は、紙媒体資料を使用して人間が目視で観察するのに比べ、入力した文字列が見落としなく検索されることにある。その一方で、個々のデータベースで使用されている転写の入力規則を知らないとデータが正しくヒットしないという点で注意が必要である。

本稿の検索で使用するのは *Thesaurus Linguae Aegyptiae* (TLA) と *Rameses Online* の 2 種類である。これら 2 種類のそれぞれについて、転写の入力規則の概要を確認しておく。

① *Thesaurus Linguae Aegyptiae* (TLA) の入力規則

トップページ

(<https://aaew.bbaw.de/tla/index.html>)

転写の入力規則

(<https://aaew.bbaw.de/tla/servlet/S04?f=h003>)

TLA の転写で用いる入力文字は付表に示した通りである。この入力文字は、次に述べる *Rameses Online* が依拠している *Manuel de Codage* (MdC) と多くの部分で共通しているが、相違点もある。相違点は、ヨッドの入力が *i* ではなく *j* となること、*Manuel de Codage* (MdC) で *s* に統一されている転写を *z* と *s* に分けること、音価不明の子音の転写に *'* を使用すること、女性形態素の前に *.* (ピリオド) を入力する必要があることである。本稿で使用している *hnq-t* 「ビール」は TLA では *Hnq:t* と入力しなければならず、*Hnqt* を入力しても目的の語はヒットしない。

②Rameses Online

トップページ

(<http://ramses.ulg.ac.be>)

Aide/Help (転写の入力規則)

(<http://ramses.ulg.ac.be/site/help>)

Rameses Online で用いる入力文字は、Manuel de Codage (MdC) に準拠しており、その一覧は付表に記した通りである。なお、Manuel de Codage (MdC) の入力規則の詳細は以下の WEB に記載されている。

Manuel de Codage (MdC), Encoding Egyptian transliteration

(<http://www.catchpenny.org/codage/#trans>)

Rameses Online の検索では、女性形態素表示の.(ピリオド) について、付けても付けなくてもよいという仕様になっている。**hnq**-「ビール」は**Hnq.t** あるいは**Hnqt** のいずれでも検索される。

5.2 Thesaurus Linguae Aegyptiae (TLA) での検索

紙媒体辞書を起点に調査を行なった結果、ブルックリンのヒエログリフ文の原文と思しき資料が、大英博物館書簡であることがわかった。そして、大英博物館書簡とブルックリンのヒエログリフ文の転写上の共通点は *p3=mr.j.wn.jm=j* 「私の中にある病」であった。このうち、*mr* 「病」の部分の綴りがブルックリンのヒエログリフ文と大英博物館書簡とで異なっているものの、この語が両者に共通した唯一の内容語であるため、まずは *mr* 「病」を検索語に設定して TLA で検索を行うことにした。

まず、「見出し語 (Lemma)」に *mr* を入力して検索を行い、その後、表示された候補の中から名詞の「病」(Krankheit; Schmerz Wb 2, 96.1-5; FCD 110; MedWb 278 ff.) を選択した。その用例は全 94 例であった。続いて、後続要素でソートをかけるべく、「ディスプレイ形式 (display format)」にて「索引

を右側文脈でソート (concordance sorted by right context)』を選択し、検索結果から *j:wn* が続く例を探すことにした。

検索の結果として見つかったのは、94 の用例中、*LRL* 9 の事例、つまり大英博物館書簡 (BM EA 10326) の 1 例のみであった。

Thesaurus Linguae Aegyptiae, Brief, pBM 10326, Brief von Djehutimesu an Bu-teh-Imen, die Schedu-em-duat und die Hemet-scherit
(<https://aew.bbaw.de/tla/servlet/GefTextDetails?u=gest&f=0&l=0&db=0&tc=18939>)

TLA で表示されている子音転写をそのまま示すと、*xr srwi=st pA mr j:wn j:m=j* となる。この転写と訳について修正案があるので述べておきたい。(3) に記したように、この文の主語は 3.SG.F の接尾代名詞であるため、転写は *=st* ではなく *=s* がよいであろう (Černý & Groll 1993: Chap. 2.4.1)。また、*=st* (本稿の筆者の考えでは *=s*) の部分について「*es (=das Bier und die Speisen)*」と訳出されているが、代名詞が 3.SG.F であるため、これを受ける名詞が複数個あるのは不自然であり、女性単数名詞の *das Bier* のみ、つまり *es (=das Bier)*」がよいであろう。

なお、TLA における *mr* 「病」の検索で、*mHr* (本稿の転写では *mhr*) という転写も散見された。*mr* 「病」を *mHr* と転写する例は、Lesko & Lesko (2002-04) で見出すことができず、本稿の筆者は *mHr* と転写する根拠を得ることができていない。

5.3 Rameses Online での検索

Rameses Online でも同様に *mr* [*mr*] で検索を行うこととした。ところが、*mr* [*mr*] で検索したところ「病」に相当する語がヒットしなかった。そこで TLA で見られた *mHr* [*mhr*] を思い出し、改めて *mHr* で検索を行なった結果、「病 ((le)mal)」が 5 例見つかった⁹。その中に、ブルックリンのヒエロ

⁹Rameses Online では、U23 の音価のうち、通例は *mr* と転写されるものを *mhr* としている。「病」の他に、「ピラミッド」の語も *mr* ではなく *mhr* となっている。

グリフ文と類似した表現が 1 例のみ含まれていた。それは *LRL 9* の例、つまり大英博物館書簡の一節であった。

Anne-Claude Honnay, Laurence Neven, in *Ramses Online: reference*
 [legacy/150/quote/275/275]
<http://ramses.ulg.ac.be/text/legacy/150?page=6&pageLength=5>

5.4 小結

デジタル媒体 (データベース) を利用した検索において、ブルックリンのヒエログリフ文と類似した表現を含む資料として、大英博物館書簡 (BM EA 10326) の 1 例が検出された。この結果は、紙媒体辞書を利用して検索した結果と同様である。

6 考察

6.1 ブルックリンのヒエログリフ文の原文

本稿では、紙媒体ならびにデジタル媒体 (データベース) を用いてブルックリンのヒエログリフ文の原文を探索してきた。その結果、まったく同一の内容を持つ資料を見出すことはできなかったが、類似した表現を持つ資料として、大英博物館所蔵 BMEA 10326 を見つけることができた。この資料は、右横書きのヒエラティックで書かれた新エジプト語のパピルス写本である。

今回の検索で、データベースという、網羅的な検索が可能な手段を用いても、検索された結果は BMEA 10326 の 1 例のみであった。もっとも、筆者の検索方法が不十分であり、今後、ブルックリンのヒエログリフ文と同一の文が見つかる可能性があるかもしれないが、現状では、BM EA 10326 をブルックリンのヒエログリフ文の元資料として捉えておきたい。

ブルックリン・ブルワリーの屋舎の壁には「Late Egyptian, translated by Dr. Kent Weeks (新エジプト語、ケント・ウィークス博士によって翻訳された)」と書かれているが、ヒエログリフ文の原文が BMEA 10326 であったとすると、この原文に対して、

- ①文頭小辞 *hr* を削除する
- ②動詞「取り除く」の語形を *swtj* から *rwj* に書き改める
- ③主語を代名詞の *=s* から名詞の *hntq-t* 「ビール」に置き換える
- ④ *hntq-t* 「ビール」の表記を同一テキスト内にある稀な綴りからよく見られる綴りに変更する
- ⑤ *mr* 「病」に見られる判読の難しい文字 (Z4 あるいは点) を削除する
- ⑥全体をヒエログリフに翻刻する
- ⑦書字方向を右横書きから左横書きに変更する

という作業が加えられていたことになる。BME A 10326 が原資料であるという前提に立った場合、①～⑤はいわば改変行為にあたるが、ブルックリンのヒエログリフ文が商業的の広告であることを考えると、非難されるべきことではない。

6.2 エジプト語研究における文献資料の扱い

ブルックリンのヒエログリフ文の原文探索によって明確になったことの1つは、エジプト語研究における文献資料の扱いである。6.1 で示した①～⑦のうち、

- ⑥全体をヒエログリフに翻刻する

という行為、つまりヒエラティック資料をヒエログリフに翻刻するという行為は、およそほぼすべてのヒエラティック資料に当てはまるものであり、エジプト学で常態となっている。

翻刻は、ヒエラティック資料のみならず、他の言語の文字資料でも利用されており、その存在価値は否定されるものではない。そればかりか、翻刻の意義の1つは、原資料の文字種の解釈を示すことにあるため、翻刻はある種の文字体系の研究で必須であるとも言える。

しかしながら、エジプト語研究における翻刻の位置付けで問題だと思われるのは、翻刻されたものが原資料から遊離し、それ自体が資料と見なされることが多いという点にある。図3にあるように、翻刻内容が研究者間

で異なることは珍しくない。それゆえ、特にヒエラティック資料を研究で扱う際には、ヒエログリフに翻刻された資料集に依拠するだけでなく、常に原資料の文字を確認する必要がある。

だが、原文検索の結果から明らかとなったように、エジプト語研究では、資料集(翻刻集)の利用が常態となっている。それを示す状況の1つが辞書や文法書の出典表記であろう。Leskoの辞書に掲載されている出典には、原資料名が書かれている場合もあるが、LRLのように資料集の略号が用いられている場合もある。特に、著名な資料集については、原資料ではなく資料集そのものが資料として使用される傾向にある。エジプト語研究のなかに身を置いていると、資料集さえ見ていればよいとの思いを暗黙のうちに抱きがちである。だが、翻刻とはそもそも判読者による文字解釈を示したものであるため、他の研究者が作成した翻刻を鵜呑みにすることなく、原資料の表記を確認すべきである¹⁰。

7 おわりに

本稿の記述の中心部分は、ニューヨークのブルックリン・ブルワリーで見たヒエログリフ文に対する原文探索の手続きとその結果の記録である。その際、新エジプト語研究で用いられる、辞書、データベース、資料集について例示するとともに、資料集における出典の見方やデータベースの検索で用いる入力文字についても言及した。この記述は、研究で用いられる暗黙知を可視化したものであり、辞書、データベース、資料集という研究ツールを利用する際に、手助けとなる情報になるものと筆者は考えている。また本稿では、エジプト語研究において暗黙のうちに了解されている文献資料の扱いについても言及し、原資料の確認が重要だとの指摘を行った。

筆者がブルックリン・ブルワリーでヒエログリフ文を見た当初、これとまったく同一の原文が存在するものと思っていた。だが、探索の結果、現状における暫定的なものとはなるが、ブルックリンのヒエログリフ文は大英博物館所蔵 BM EA 10326 の一文を改変したものであるとの見解に至っ

¹⁰ヒエラティック資料のヒエログリフ翻刻の問題点については、たとえば永井(2011)、永井(2014)を参照のこと。

た。この見解は、あくまでも学術的な調査検討の結果であり、たとえこの見解が正しいものであったとしても、ブルックリン・ブルワリーにあるヒエログリフ文の存在価値を否定するものではない、ということを経験しておきたい。

【参考文献】

- Bakir, Abd el-Mohsen (1983) *Notes on Late Egyptian grammar: A Semitic approach*. Warminster: Aris & Phillips LTD.
- Cavillier, Giacomo (2018) *Corso di neogiziano: Con elementi e nozioni di scrittura ieratica*. Torino: Kemet.
- Černý, Jaroslav (1939) *Late Ramesside letters*. Bibliotheca Aegyptiaca IX. Bruxelles: Édition de la Fondation égyptologique Reine Élisabeth.
- Černý, Jaroslav and Sarah Israelit Groll (1993) *A Late Egyptian grammar*. 4th updated edition. Rome: Biblical Institute Press.
- Davies, Benedict G. (1999) *Who's who at Deir el-Medīna: A prosopographic study of the royal workmen's community*. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Davies, Benedict G. (2018) *Life within the five walls: A handbook to Deir el-Medina*. Wallasey: Abercromby Press.
- Di Biase-Dyson, Camilla, Frank Kammerzell and Daniel A. Werning (2009) 'Glossing ancient Egyptian: Suggestions for adapting the Leipzig Glossing Rules'. *Lingua Aegyptia* 17: 343-366.
- Erman, Adolf (1933) *Neuägyptische Grammatik*. Zweite, völlig umgestaltete Auflage. Leipzig: Wilhelm Engelmann.
- Gardiner, Allan (1957) *Egyptian grammar: Being an introduction to the study of hieroglyphs*. 3rd edition. Oxford: Griffith Institute.
- Grimal, Nicolas, Jochen Hallof and Dirk van der Plas (2000) *Hieroglyphica: Sign list- Liste de signes- Zeichenliste*. 2nd edition. Utrecht-Paris: Publications Interuniversitaires de recherches Égyptologiques informatisées.
- Janssen, Jac J. (1960) 'Nine letters from the time of Ramesses II'. *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 41: 31-47.

- Janssen, Jac J. (1991) *Late Ramesside letters and communications*. Hieratic papyri in the British Museum VI. London: Trustees of the British Museum by British Museum Press.
- Junge, Friedrich (2008) *Einführung in die Grammatik des Neuägyptischen*. 3., verbesserte Auflage. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Korostovcev, Michail (1973) *Grammaire du néo-égyptien*. Moscou: Naouka
- Leemans, Conrad (1861) *Aegyptische monumenten van het Nederlandsche Museum van Oudheden te Leyden*. II. Leiden: Brill.
- Lesko, Leonard H. and Barbara S. Lesko (2002-04) *A dictionary of Late Egyptian*. 2 volumes. Providence, Rhode Island: B.C. Scribe Publications
- 永井正勝 (2011) 「大英博物館所蔵の神官文字パピルス写本「BM10682」に関する書誌学的及び文字素論の所見」『文藝言語研究』(言語編) 59 : 107-125.
- 永井正勝 (2014) 「トリノ・エジプト博物館所蔵 Papyrus Turin Cat. 1885 の神官文字に関する覚え書き」『一般言語学論叢』17 : 153-169.
- Neveu, François (1998) *Grammaire du néo-égyptien: La langue des Ramsès*. 2e impression. Paris: Kheops.
- Satzinger, Helmut (2020) “*Is there not one among you who understands Egyptian?*”: *The late Egyptian language: Structure of its grammar*. London: Golden House Publications.
- Wente, Edward F. (1967) *Late Ramesside letters*. Studies in ancient oriental civilization 33. Chicago: The University of Chicago Press.
- Wente, Edward F. (1990) *Letters from ancient Egypt*. Society of biblical literature, Writings from the ancient world series 1. Atlanta: Georgia.
- Werning, Daniel A. (2015) *Einführung in die hieroglyphisch-ägyptische Schrift und Sprache: Propädeutikum mit Zeichen und Vokabellektionen, Übungen und Übungshinweisen*. Berlin: Humboldt-Universität zu Berlin. [Online <https://edoc.hu-berlin.de/handle/18452/14302>]

Searching for the original text of the Hieroglyphic sentence on the wall of the Brooklyn Brewery building in New York: An attempt of visualization of tacit knowledge in Egyptian studies

Masakatsu NAGAI

I read a Hieroglyphic sentence on the wall of the Brooklyn Brewery building in New York in 2014 that says *rwj ḥnq-t p³=mr j.wn jm=j* “Beer has dispelled the illness which was in me”, as translated by Dr. Kent Weeks. After coming back to Japan, I set about searching for the original text of the Brooklyn Hieroglyphs and found a sentence on Hieratic Papyrus BM EA 10326, *ḥr srwj=s p³=mr j.wn jm=j* “Now, it has dispelled the illness which was in me”. The sentence of BM EA 10326 is similar to the Brooklyn Hieroglyphic phrase but there are some differences between them; BM EA 10326 (1) begins with the particle *ḥr* “now”, (2) uses the verb *srwj* “dispel”, (3) uses the pronominal subject =s “it”, (4) spells the word *mr* “illness” differently, and (5) is written in the Hieratic script. Based on these, therefore, we can suppose that someone composed the Brooklyn Hieroglyphic sentence by editing sentence of BM EA 10326.

Uehiro Project for the Asian Research Library (U-PARL),

The University of Tokyo

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

E-mail: nagai.masakatsu@mail.u-tokyo.ac.jp

【付表】 転写記号と入力文字

代表的な 一子音文字	本稿で使用する 転写記号	TLA における 入力文字	MdC における 入力文字
G1	<i>ʒ</i>	A	A
M17	<i>j</i>	j	i
M17-M17	<i>y</i>	y	y
Z4	<i>i</i>	y	y
D36	<i>c</i>	a	a
G37, Z7	<i>w</i>	w	w
D58	<i>b</i>	b	b
Q3	<i>f</i>	f	f
G17	<i>m</i>	m	m
N35	<i>n</i>	n	n
D21	<i>r</i>	r	r
O4	<i>h</i>	h	h
V28	<i>ħ</i>	H	H
Aa1	<i>ḥ</i>	x	x
F32	<i>ḥ</i>	X	X
O34	<i>z</i>	z	s
S29	<i>s</i>	s	s
N37	<i>š</i>	S	S
N29	<i>ḳ</i>	q	q
V31	<i>k</i>	k	k
W11	<i>g</i>	g	g
X1	<i>t</i>	t	t
V13	<i>ṭ</i>	T	T
D46	<i>d</i>	d	d
I10	<i>ḏ</i>	D	D
音価不明		,	